

肉食の迷信（新しき世界へ 1968年12月号）

桜沢如一

後藤光男訳

教会に行く度に、脇腹を刺し貫かれ、木の十字架にはりつけにされた死屍によってショックを受けた未開人の夫人は、もはやそこへは行くまいと決心していた。しかし、或る日、彼女は市場を訪れて新たな驚きに接したのである。そこで彼女は一ダースばかりの皮をはがれた豚の頭と丁度生まれたばかりの赤ん坊の足とそっくりの小さな足とが肉屋の店頭並んでいるのを見たのである。

一 肉屋が多く、ヤサイ屋がこんなに少ないのはなぜだろう？彼女は言った。

彼女の生まれた国では、彼女は毎日市場に行くのが好きだった。各季節毎の新鮮なヤサイを見ることは彼女にとって大きな楽しみであった。ヤサイの買出しは毎日の楽しい仕事であった。しかし、今日、彼女は見るだけでゾットするこれら獣の死骸のため、市場へ行くのが恐ろしくなった。

一 ナゼ人はたくさん肉をたべなければならないのだろう？

一 ヤサイがたくさんないからである。

一 ナゼもっとたくさんヤサイを作らないのだろうか？

一 こんな”陰性”の気候の下では、たくさんの植物を栽培することが出来ない。あなたも御覧の通り、植物は非常に少い。しかし我々のくにではもっとたくさんある。

一 何百種類もですね？

一 そう、その通り。野草、河の藻、海草も含めて恐らく千種類に及ぶ食料品(動物性及び植物性)を我々はもっている。何とスバラシイことでしょう！

一 “山の幸””野の幸””河の幸””海の幸”……何とスバラシイことでしょう…

一 “沖の藻”と”辺つ藻”, ”あおのり”と”なのり”, ”わかめ”と”あらめ”, ”ひじき”と”いしげ” ……おゝ! 何とスバラシイこれらの海草!

一 そしてこれら数百の魚類!

一 しかし,もし我々が度々少量づつでも魚をたべれば, 我々も又屍をくう者ということになるだろうか?

一 それにはちがいない。だから屍をたべる“文明人”を余りに非難する必要はない。

一 その通り。ともかく,他人を非難する必要はない。その上,我々の家では非常に僅かしか魚もたべない。そして我々も又魚なしですますことも出来る。

一 つまり,もし我々が生涯にたった一回だけでもホンの小さな小えびをたべたとしたなら,我々は象をたべる人々をさえとがめるどんな権利ももたない。もし我々が生涯の中でたった一度でも小さな昆虫,例えば一匹の蚊を知らずに殺したとしたならば,我々は”殺人者”に外ならず,他の殺人者をとがめるどんな権利もない。これら肉食者達を憎む必要はない。人間は自由であり,何であろうと行ってよい。彼の好みや環境によって人は菜食者にも肉食者にもなることが出来る。しかしそこには一つの限界がある。我々の無双原理によれば,やろうとすることをすべて生命がけで出来るだけやってよいし,むしろそうやるべきである。しかし,自由を乱用したり,けちになったり,迷信に陥ることはさげねばならない。筋の通った行動をとらねばならない。

しかし,待って下さい!この場合,肉をたくさんたべることこそ迷信の証拠ではないだろうか?それは必要なことだろうか?この気候の下では肉なしですますことが出来ないだろうか?

一 だがそれにしても,あなたは植物しかたべないたくさんの動物がいることを知っている。彼らは冬中は乾いた植物と水だけで生きてゆける。空飛ぶ鳥や山中の雪の中の兎がそれである。人間はその知性,その体質,その社会性,その理想主義,その思考力の点で生物学的に動物にまさる。その適応性に至ってはもっと大きい。結局,我々の無限の自由を可能にするものは無限の適応性なのである。これら食物に対する特異質は…(肉,白サトウ,牛乳,果物,アル

コール等なしですますことが出来ない人々,或はそれらなしではたえられない他の人々)既に病気で,消化器は勿論,彼らの感覚,感情,知性,社会性,思想においても重大な病気がある。彼らは身体的道徳的に病気である。彼らは身体的病気と精神的病気との間の中間段階に達したのである。すなわち,アレルギーである。

我々はいかなる食物なしでもすまされるし又,それらなしでたえることも出来る。我々は無限の乃至は完全の自由をもっている。もしも我々が若干の食物なしですますことが出来ず,或はそれらなしでは身体的,精神的,道徳的にたえられないならば,それは病気の徴候である。既に心身共に非常に進んだ病気にかかっていることである。しかし,生理現象は心理現象の基礎であるから,すべての心理的病気は生理的病気の副産物にすぎない。生理的病気は身体面で分析されうる。しかし,我々は無限の適応可能性を生れながらさずかっているので,我々はたとえ最初からいかなる環境におかれたとしても,すべての生物学的,社会的,経済的,思想的な水準に自らを適応させることが出来る。

ここに生命の複雑さがある。驚くべきことに我々はいかなる伝統的環境になれない人々には,しばしばショッキングな子供らしい奇妙な習慣をたくさんもっている! 我々が恰かもまだ歯の生えない赤ん坊であるかの如く牛乳をのむこと,恰かも未開人の小さな子供のようになけんか腰で政策,経済,知的なものごとをムチャクチャに論争し合うこと。ダイヤの首飾りや宝石類,或は貝類を耳たぶや唇に孔をあけてつるし,あたかもこれらの富が永久,恒久,絶対,無限の価値あるかの如く陳腐な一時的の相対的かりそめのものを所有することに自信あり気の態度をとり,或は多量の紙幣や”称号””資格”を宝物の如く大切に所有することで高慢になる。これらすべては大変面白いことではあるが,この傾向は度を過ぎれば”迷信””信仰””信心””悪信仰””盲目信仰””暴力”となり,けちんぼう,利己主義,排他性,独占や独裁の乱用に外ならなくなる。そしてこの限界は相対の世界と無限絶対の世界との間の境界線であるから,科学にひたりきった科学思想家,永久に宇宙構造のビジョンを持たない人々はいつものこの限界の外にあり,それ故,宇宙構造のビジョンを持つ,つまりいわゆる”真理”をつかんだ

人々が無限の豊富の中に自らを発見し、彼らの望むことすべてを際限なく行うことが出来るのに反し、彼らの所有する小さな宝の失われることを常に恐れおびえるのである。

一 あなたは大司祭です。私はあなたからたくさん聞かせてもらいました。もしあなたがのぞむなら、私はあなたの言った一語一語をすべてくりかえすことが出来ます。

一 よろしい。もう止めておこう。簡単に言うと、私の言いたいのは、盲信でも信仰でも知識でもすべて全部を非難するわけではない。それらは尊重すべきで、それらなりに存在理由がある。

一 すべてはそれなりの存在理由がある。それは明白です。

一 互いに対立する明らかな矛盾が多くあるのはこのためです。

一 それ故、かような論争でそれを終らせるには、我々はもっと高い判断力をもたねばならない。

一 しかし、この論争を通して人はその判断力を常に進歩させている。

一 それはそうです。活?な又は静かな論争なくして我々の判断力は決して進歩しません。あなたは人類の何千年の斗いの歴史でそれを学びました。全人類にとってあのような不毛の戦争の中に何の結果も得られていません。なぜでしょうか?

一 判断に間違いがあるからです。それは専ら感覚的、感情的、或は知的の低い判断力ばかりを目ざすような生理学、医学、社会学的教育の結果です。低判断力は高判断力よりはるかに強いです。我々の高判断力は精神的であるのに、我々は物理的物質的世界に生きているからです。

一 そこに永遠の矛盾の原因があります。最も強力な低判断力はより弱い高判断力によって訂正され、指導されねばなりません。低判断力は官能的、情緒的というように物理的で、高判断力は精神的理想主義的です。低判断力の政府の形体はかつて高判断力の賢明な思想家によって発見されたものです。それは実際的にも理論的にも立派な教えでした。それが、数世紀たつ中に、その弟子達やその継者達によって少しずつ変形させられてしまいました。それ

が外国に導入された際既に理論においても実際においても全くちがったものになる迄に変形させられていました。

キリスト教や仏教やヒンズー教等が現実のそれらの形が形が変っているのはそのためである。……これらの教えの最も顕著な変形の例は”迷信”という形で汚されて再発見されることであり、そこには人目をひく近代的設備や警察,政府,医学等のような組織力にも拘らず、いわゆる”罪”,”殺人””病気”等のそれらの何干もの形骸をもって人類を救済出来るどんな司祭もいないということである。……それなのに、昔の賢明な思想家達は彼らの行く所どこでも、どんな道具も使うことなく、祈りと断食だけで至極たやすく平和の社会を建設することが出来たのである。

迷信とは"信仰"という無知であり、或は異常な超自然の力があることを信じ込まされた原始的な精神状態であると簡単に人は言うことが出来た。信仰とは魔術のもう一つの形なのである。もし誰かがその性質やメカニズムやその価値について何も知らないのに、医学や治療や手術に信仰をもつならその人は無知のとりこであり、その迷信のドレイである。多くの人々がこの種の迷信の餌食となって苦しんでいる。:アスピリンやキニーネや抗生物質をすゝめたり、自らとったりするすべての人々、そこから根本原因やそのメカニズムやその価値を学びとることを知らず、或はしようともせず、医学や既成の自然法則又は科学的法則なるものに専らたよっている人々、つまり、自分自身で判断する代りに他人の判断を借りてばかりいる人々はすべて、迷信の餌食となって苦しむ用意をしている人々である。すべての病気の真の原因を知ることなく、何らかの奇蹟的効果のありそうな医薬を探し求める学者達は魔術の徒弟に外ならない。

もしそれが単なる嗜好のためではなく、このような種類の食事法が、肉は蛋白,カロリー,ビタミンに富むが故に健康にとって不可欠だという信念の下に行われるならば、肉食はリッパな迷信である。肉なしですませ、健康で非常に幸福な人々がたくさんいる。快樂のために肉食することは自己中心主義,利己主義,小児病的な精神状態、それ故、農業,経済,生物学的見

地からは我々の自然行為に匹敵する。全人類が肉を食べるということは、プラトンや仏陀等の古代の賢者も言ったように、不可能なことである。

しかし、利己主義はそれが我々の低判断力の現れであるにしても、それ自体を否定するわけにはいかない。判断力やその根本的基盤である記憶力はそれが低くとも尊重すべきである。低判断力なくしてはどんな高判断力もありえないからである。もしあなたが最高判断力の思想家ばかりの世界を想像してみたなら、あなたはそこに住もうとは思わないでしょう。そこには面白いことが何もないからである。(もしもあなたがこのかりそめの、雑多な、犯罪人や単純な頭の人々や病人や困難、悲惨にみちた人生に非常に執着するならば、そういうことしか気付かず、そういうことばかりするような低判断力をあなたはもっているということである。)そして作家、小説家、新聞記者は警官や医者と同じく失業者となるであろう。かような世界では人は疲れてしまうだろう。余りに単調で退屈になるであろう。現実には小説より奇なりで、ここに我々の存在理由がある。

それ故、低判断力をとり除く必要はない。我々は高判断力と共に低判断力をももつ必要がある。むしろ、我々は低判断力を懐中電灯のような暗夜を導くものとしての価値を認めるべきである。そして我々は、このランプは日中輝く太陽のおかげで点灯されていることを想起しよう。低判断力は人工照明であり、高判断力は太陽光線なのである。迷信というものは太陽にくらべればこんなにも貧弱なランプを全面的に信じ、そのエネルギーの根源である太陽には一顧も与えないことにある。

肉食の迷信は、低判断力のもう一つの現れにすぎない資本主義によって固められ、促進された医学、生理学、栄養学という科学を現実には支配する価値規準、感覚的欲望にもとづくものである。あなたは民衆の食物の歴史をひもとくことによってこれを確かめることができるであろう。フランスでもドイツでも昔はこんなにたくさん肉を食べなかった。私の友、アルバート・シュヴァイツァーは彼の子供のとき、一週に一二度、スープとして肉を食べたことを後悔していた。

(仏文イン・ヤン誌 1965.12 月号)

本文の複写、複製、転載、その他いかなる方法による使用の際には日本 CI 協会にご相談ください